

## 後藤彰信著『石川三四郎と日本アナキズム』（同成社、2016年）

### 1. 内容の紹介

序章 日本のアナキズム論一切穴を潜る人々

第一章 アナキズムの受容と伝統思想

第二章 初期社会主義におけるアナキズムの位置

第三章 社会運動としてのアナキズムとその社会構想

第四章 社会運動の退潮と新しい統合原理の模索

終章 日本アナキズムにおけるインターナショナリズム

#### \*石川三四郎について

1876（明治9）年生～1956（昭和31）年没。明治から昭和にかけての無政府主義者。埼玉県児玉郡山王堂村（現、本庄市）の五十嵐家の三男に生まれ、のち石川家の養子になる。1901（明治35）年、東京法学院（中央大学の前身）を卒業。その直前、本郷教会の海老名弾正より受洗。1902（明治35）年に『万朝報』の記者になったが、日露戦争をめぐり幸徳秋水や堺利彦らと退社し平民社を結成し、週刊『平民新聞』で非戦運動に活躍した。日露戦争後、『平民社』は解散し、安部磯雄・木下尚江らとともにキリスト教社会主義に立つ雑誌『新紀元』を創刊した。1907（明治40）年と1909（明治42）年の二度、筆下事件で入獄。入獄中に『虚無の靈光』を執筆する。

大逆事件後、政府の圧迫を逃れて1913（大正2）年に渡欧し、フランス、ベルギー、イギリスなど各地を転々とし、第一次世界大戦を経験した。その間、ポール＝ルクリュ夫妻や哲学者エドワード・カーペンターらと親交を結び、無政府主義を深めた。1920（大正9）年帰国後、「土民生活（デモクラシー）」を講演。翌1922（大正11）年、再渡欧し翌年帰国した。1927（昭和2）年、東京府下千歳村（世田谷区船橋）に共学社を設け、『ディナミック』を発刊して無政府主義的啓蒙運動に努めたが、1934（昭和9）年、官憲の圧迫により廃刊した。その前年北京に行き、東洋文化に関心をもち、以後東洋史研究に没頭した。第二次世界大戦後、アナキスト連盟を組織し、無政府主義の理論・宣伝活動を行なったが、1956（昭和31）年に80歳で死去した。<sup>1</sup>



<sup>1</sup> 藤井松一「石川三四郎」『国史大辞典』、参照。

## 内容要約

### 序章 日本のアナーキズム論—切穴を潜る人々—

- ・本書全体の問い：「近代日本社会において、アナーキストであるということはいかなる意義と意味をもつのか」
  - 戦前の「社会編成原理」：天皇制による民衆の日常的な道徳・価値と、「国家」・「伝統」的な大義・価値が直結
  - 戦前の諸社会運動は国民国家の形成過程において、このシステムを見過ごし、体制の非「科学」性の暴露に留まっていた？
  - ⇒「社会編成原理」に対して、より普遍性をもつ価値を対置しようとする営み＝「価値形成論的立場」
- ・日本近代社会において、人はなぜアナーキストになる（なりえる）のか？

「共同的な小社会」 — 「切穴」 — 資本制的な近代市民社会  
(向こう側。多様なありかた) (こちら側)



「切穴」のイメージ図

→「垂直的侵入者」性。「こちら側」の価値と、ラディカルに対立する価値を対置

- ・目的：
  - ・石川の思想的営為とその今日的意義を、思想の内在的分析とアナーキズム運動との連関から、アナーキズム運動史のなかに見出す
  - ・日本のアナーキズムの「価値形成史」の曲折とその達成を明らかにする

### 第一章 アナーキズムの受容と伝統思想

- ・石川思想形成に伝統思想が果たした役割
  - 本郷教会でのキリスト教の受容…文明への懐疑。キリスト教社会主義の立場から、社会とともに個のあり方も問題視
  - 『虚無の靈光』…東洋思想（老子・陽明学・朱子学）に依拠し、キリスト教を相対化・脱却。独自の歴史観（マルクス+クロボトキン）。「虚無化」。
  - 石川思想の基調・孤立性：「個の変革と社会の変革の同時遂行」という視点。「個と社会の統合原理を明らかにし、それへの回帰を目指す方向」
    - ⇔幸徳秋水（直接行動派）：社会進歩のために犠牲を厭わないとする「志士仁人」と自己を規定。「社会の変革によって個も変わるという楽観主義」。「歴史の上向的な推転を信じ、それに意識的に関与しようとする方向」
- ・石川と田中正造、大杉栄と佐々木喜善の書簡での交流について

## 第二章 初期社会主義におけるアナーキズムの位置

- ・本郷教会と平民社における「自由恋愛論争」（1904）と「国家魂論争」（1905）

→石川：「愛」を人生の究極価値とし、それを実現するためとして自由恋愛を支持。「愛」の実現を妨げる秩序・制度など社会的抑圧の除去を志向  
⇒価値的な個のありかたの模索するなかで、それを保証する社会のありかたを構想

## 第三章 社会運動としてのアナーキズムとその社会構想

- ・石川と吉野作造の思想的軌跡の交差（本郷教会時代 / 石川帰国時である 1920 年）  
-1905 年（「不協和」）…海老名の影響。吉野：国家と個 / 石川：個と社会  
-1920 年（「交響」）…

吉野：「理想主義的現実主義」＝「人道的無政府主義」（強制組織の否認）を究極の理想として擁護し、その理想に国家を近づけていこうとする

石川：「人情」・「任侠的精神」を基準とした「文明」観や「進歩」観→「土民生活」論（普遍的なもの？「ナショナル」なもの？）

→2 人の交差：無支配というアナーキズム的な理想の共有や、日本の政治風土（「ナショナル」なもの）の相対化？

## 第四章 社会運動の退潮と新しい統合原理の模索

- ・クロポトキンら「十六人宣言」（1916。第一次世界大戦の即時講和反対・戦争続行を主張）に石川が署名した背景

→社会主義運動における特定の思想潮流から距離をおく石川の性格。「暴力」から「人道」を、「強者」から「弱者」を守る自衛戦として正当化。

- ・1920 年代のサンジカリズム運動の展開

→石川は「土民生活」論（「変革主体論」）を普及・実践。一貫してサンジカリズムを擁護。

⇒「土民」に、自然に則って生活することから「個と自然」の、自律的存在として連帯することから「個と社会」の統合を見る。

- ・石川による統合原理の模索の移り変わり（『新紀元』でのキリスト教社会主義 ～ 1930 年代の歴史哲学・東洋史研究に至るまで）

## 終章 日本アナーキズムにおけるインターナショナリズム

- ・日本アナーキズムにおけるインターナショナリズム（初期社会主義 1905～運動衰退期 1935 まで）

→国際的な社会主義運動に依拠することで、自己の運動の「正当性」・「科学性」・「世界性」を確保（「ナショナル」なものとの対決回避）

- ・石川におけるインターナショナリズム：「ナショナル」なものとの相対化し、それを乗り越え、インターナショナリズムを構築

- ・天皇制国家：「ナショナル」なものを守る＝国家への献身

⇒石川の思想は、「グローバリズム」への対抗的価値として、普遍的価値を支えうる「インターナショナリズム」を構築してゆく論理を構想するときの一つの指針を提供

## 2. コメント

- ① 序章では、「なぜ人はアナーキストになる（なりえる）のか？」という問題について、「人は切穴を潜ることでアナーキストとなる」(p5) と表現されている。ここでとくに「切穴」という言葉が用いられていることには、なにかの背景があったのか。
- ② 石川の「土民生活」思想について、「土民生活」思想は、現代社会においてどのような意味をもち、どう活かしていくべきか。また、石川の「土民生活」と吉野の「民本主義」とのちがいや、つながりとは何か。
- ③ 第2章4節「石川の自由恋愛論と社会構想」において、石川の思索の特徴として、「国民国家の枠組みに回収されない個のありかた」(p108) を求めるという点が指摘されている。一方で、石川は「人情」や「任侠的精神」(「ナショナル」なもの) を評価したり、「土民生活」論では、『土民生活』という普遍概念は、日本という精神風土に定着して初めて機能を展開し得る」(p134) との指摘から、「土民」の生活の場としての「ナショナル」なものの価値を石川は認めている面もあると考えられた。このような、一見矛盾しているようにも感じられる、石川における「ナショナル」なものの位置付けに関しては、どのように考えるべきか。